

めぬまこじまちくし 妻沼小島地区を知る③



めぬまこじま ひこうじょう 妻沼小島にあった飛行場

熊谷市内で唯一、利根川の北側にある妻沼小島地区には、尾島飛行場と呼ばれる滑走路がありました。大正7年(1918)、利根川の河川敷を平らに整えて飛行場が完成し、「小島前河川敷飛行場」とも呼ばれていました。



飛行機と格納庫

現在の太田市に生まれた中島知久平氏が「中島飛行機株式会社(当時は飛行機研究所)」を創業し、飛行機の生産に向けた試験が、この飛行場で行われました。飛行場は太田の尾島地区と妻沼小島をまたがる広大な規模で、事務所は尾島側にありましたが、滑走路の大半は妻沼小島に位置していました。

かっそうろ ひこうじっけん 滑走路での飛行実験

大正7年8月には、日本で初めて民間の会社が製作した飛行機「中島式I型1号機」の飛行実験が行われました。飛行機は滑走路を勢い良く飛び出しましたが、利根川の堤防に接触し、失敗に終わりました。

その後も失敗が続きましたが、大正8年2月(1919)、新試作機「4型6号機」が無事に上空を飛行し成功しました。

同年4月には、宙返り飛行や低空飛行が披露され

る盛大な行事が開催され、利根川の両岸に5万人の見物客が集まりました。また、同年10月には、この飛行場で実験を繰り返し、改良を加えた飛行機が、東京と大阪の間を飛行する大会に出場し優勝するなど、高い評価を受けました。それ以降、「中島式」と呼ばれる型式モデルが、日本中で知れ渡るようになり、飛行機の大量生産が始まりました。

せんそう かげ きゅうなかじまけじゅうたく 戦争の影と旧中島家住宅

昭和10年代になると、中島飛行機は戦争で使う戦闘機の生産を進めました。戦時中、飛行場では、多くの戦闘機を格納したほか、太平洋戦争に向かう飛行隊の発着も行われていました。

このような関係から、妻沼小島でもアメリカ軍の空襲があり、住宅や田畑などが燃えてしまう光景は、その当時の人々の記憶に残っているようです。

戦後すぐに飛行場は閉鎖され、姿を消しましたが、昭和5年(1930)、中島知久平氏が飛行場の北側に建てた「旧中島家住宅」は保存され、その当時の様子を今に伝えています。



旧中島家住宅(太田市)

妻沼小島の飛行場の歴史には、空への憧れと飛行機乗りのロマンが込められています。

※参考

小島歴史研究会『私のふるさと小島』2014年ほか
熊谷市立江南文化財センター 山下 祐樹